

今だからこそ意味がある。 「NARUKAMI STYLE Flute Collection」を 34年ぶりにリリース



90年代に一世を風靡したフルーティスト 鳴上亜希子氏が、34年ぶりに再始動し、アルバムをリリースした。70歳を超えた今、読者に伝えたいことは？
ピアニスト・作曲家の安田芙充央氏との対談でお二人に存分に語っていただいた。

鳴上亜希子 & 安田芙充央 (作曲家)

収録の空気感を詰め込んだ アルバム

— 鳴上さんは34年ぶりの再始動ということですね。

鳴上：はい。両親の介護があって、演奏活動からはほとんど離れていました。

安田：鳴上さんは70歳を超えていらっしゃるのですが、この年齢になるといろんなことから解放されて思うように活動できると思うんですよ。今回のアルバムのコンセプトは「メロディやフレーズを聴かせる」というものですが、大人だからこそ出せるものがあると思い、あえてこのテーマにしました。

— 今回のアルバムにはクラリネット奏者のヨアヒム・バーデンホルストさんも参加されています。この経緯は？

安田：もともと僕の知り合いだったので、来日するのを見計らってそれでなんとか一日開けてもらい録音しました。すべてワンテイクでOKでした。2、3時間で

彼の収録はすみました。

— それはすごいですね。レコーディングって何テイクか録って、その中で一番いいものを、となると思うのですが。

安田：彼は日本ではあまり認知されていないのですが素晴らしい奏者なんです。今回のアルバムはその場の空気感を大切にしたいと思っていたのですが、それが実現できました。

鳴上：その場限りの、その時しか味わえない時間を過ごすことができました。これはすごいことですよ。収録曲のいくつかは安田さんがかっちりアレンジされているものもありますが、「ふるさと」は、ヨアヒムと私でメロディを入れ替えながらメロディを作り上げました。これはコードもなかったんですよ。

安田：鳴上さんがメロディを吹いたその音を聴いて共演者はコードも即興で演奏しました。

鳴上：実は音合わせもチューニングもなくて、流れて録れました。

— それでアルバムが完成するのはすばらしいですね。

安田：ヨアヒムという天才が入ったことでできたことなんですよ。アドリブはここまで、コードはこう、とやると、その枠でしか演奏できないから面白くないでしょう。

鳴上：だからこそフレッシュな気持ちで演奏できましたし、それがみなさんに伝わればいいなと。

安田：この年齢になっても解放されれば、こんなに素晴らしいことができる……それを記録したアルバムですね。

— シンプルにメロディを美しく歌く、というのを体現されたのです。

安田：我々の年代になると、義務感もないし、楽しいことを優先できる。鳴上さんも収録は楽しかったみたいですね。

鳴上：本当に楽しかった。この世界はまたとないなというのが、パッケージされています。



クラリネット奏者のヨアヒム・バーデンホルスト氏

背中を押すきっかけが必要だった

——今回急にアルバムを作ろうとなったきっかけは？

安田：34年前のアルバム「Sweet Time」をリリースしたあと、2枚目を作る予定だったのです。それができなくなって、ずっと引きずっていたんですね。年齢も70代になって、今しかないかなと。でも最初は嶋上さんの音が出るから配でした（笑）。

嶋上：34年間、ほとんど楽器も吹いていませんからね。毎日介護にまわっていました。毎朝朝4半に起きて、ずっとケアをする生活でしたので、楽器を吹く気が起きなかったんです。やはり命には限りがあるので、そちらが大事でしょう。介護をしていたとき、京都市からイベントで演奏するお仕事を3回ほどいただきましたが、その時だけ一生懸命フルートの練習をしました（笑）。それ以外はケースを開けることもなかった。

だから今回のようなCDを取録するという機会がくるとは考えてもいませんでした。安田：ほっとくと何もやらないでしょ、だからきっかけが必要だった。

——「やろうよ」と背中を押すのが大事ですね。

安田：やったほうが絶対に面白いですからね。

——久しぶりのレコーディングはいかがでしたか？

嶋上：本当に楽しくて、スタッフの方も含めてみんな天才だということを実感しました。周りに押されてみなさんの世界に連れて行ってもらった、という感じです。

安田：フルートの愛好家の方でも年齢の高い方はいらっしゃると思うんですが、なにかきっかけがあれば、いろんなことを楽しめると思いますよ。

嶋上さんも、これで味をしめたので次のアルバムを（笑）。

——今回録音に当たって苦労されたことはありますか？

安田：嶋上さんはないような気がします（笑）。

嶋上：まったくないです（笑）。楽しいな、嬉しいなという思いばかりでした。安田さんは？

安田：嶋上さんがそういう気持ちで吹けるように苦労はしましたけど（笑）。準備はメンバーが素晴らしいだったのでそんなに大変ではありませんでした。ただフルートは単旋律の楽器ですから、どんなに楽譜にメロディを吹いても、ダサい伴奏をつけるとがっかりされるでしょう。さらにアレンジに斬新さもないといけないうのでそういう部分での苦労はありました。

——アレンジのときに苦労が？

安田：いや現場で作ったものがほとんどです（笑）。事前に譜面をきっちり作った曲もありますが、アレンジによって嶋上さんのメロディの吹き方も変わるので、だから現場で作っていくのも面白いんですよ。

何度も聴いてもらうCDだからといって、完璧を求めると音もメロディも固くなってしまいますし。

嶋上：それだけは避けたいと思いました。

安田：テイクを重ねれば重ねるほど、つまらない演奏になることが多い傾向がありますね。

嶋上：リハーサルの感覚で、「あれ？ こんな音が出る。次はどうなるんだろう？」と思いつながら進んでいった感じです。

安田：それも作戦です（笑）。

嶋上：吹いていてワクワクの連続でした。それがパッケージされているのが今回の

一番よかったところですよ。何回も聴いてもらえれば、聴くたびに発見があるかもしれないですね。ぜひ大音量で聴いていただきたいですね。スタジオのままの空気感が伝わるのではないかと。

フルートは健康になれる楽器

——嶋上さんのフルートで素晴らしいと感じる場所は？

安田：まずフルートは単旋律でその人の人生も感じられるところが魅力です。音程やリズムが単純に合っているということだけではなく、奏者のすべての人生観を乗せた音が出せるところがいいですね。だからこそ音に説得力がないといけないう楽器ですが、それが嶋上さんの音からは伝わってきます。

昔ほどの楽器でも音を聞けば、誰々が演奏している、とわかるものですが、今はそういうプレイヤーは少なくなりました。嶋上：昔はジャン＝ピエール・ランバル、ジェームス・ゴールウェイ、ジュリアス・ペーカーなど、音を聴けばすぐに分かったものですが、たしかに今は少なくなりましたね。

安田：今はきれいに吹きすぎているのかもしれないですね。本来なら単旋律の楽器でも演奏すれば、その人なりの味が出るもので、いろんな表現を聴くことができるはずですよ。昔のレコード、たとえばアルフレッド・コルトーなんかはミスもたくさんあった。でもそれが逆に良かったりする。

——そう考えると、今は完璧を求めすぎているのかもしれない。

安田：おっしゃる通りだと思います。むしろこれからはワンテイクで収録、のほうがいいかもしれません。

嶋上：YouTubeでファーストテイクが流行っているのはそういう理由かも。リアル感があってとてもいいですよ。人間味も感じられます。

——嶋上さんは久しぶりの収録ということで、不安はありませんでしたか？

嶋上：久しぶりに楽器のケースを開けたのがこのアルバムの話が決まった昨年の

Profile 嶋上亜希子

京都出身の名フルーティスト。桐朋学園大学にて林リ子に師事。名盤「Sweet Time」から34年のブランクを経て奇蹟の復活。オリジナルもきめた新しい世界をフルートで奏でる「アルカミ・スタイル」の力を活かしリラックスした音楽からはそよ風が吹いてきます。自然体の音楽があたらしいフルートの世界をつくりまします。

Profile 安田美充央（ピアノ・作曲）

コンポーザー・ピアニストとしてヨーロッパ・日本を拠点に活動。オペラの作曲・観劇「Der Kastanienbaum」(ミュンヘン・オペラ・フェスティバル) など新しい試みにも挑戦し続けており、クラシック、ジャズを越境した「現代でも最も個性的なピアニスト」(『Keller Nachrichten』紙) と評される。作曲は2005年スイスで自身のピアノとバーゼル室内管楽団に初演された「ピアノ協奏曲」、名手オードロ・アンゼロットをソリストに迎えた「アコーディオン協奏曲」など多数。

8月。まず楽器は大丈夫かな？と不安はありました。それで楽器をメンテナンスに出して、帰ってきてから音が出ることを確認し、それから身体のメンテナンスも行ないました。背筋、腹筋がゼロになっていましたから、しかもその前に足を骨折していたので1年間全然動けなくて、その間に身体が固まってしまいました。トレーニングを始めて3ヶ月、4ヶ月では時間が足りなかったですね。

安田：フルートケースを34年間ほとんど開けていない晴上さんでもレコーディングができたから、どなたでも可能性はあるということですか（笑）。

——トレーニングはジムで？

晴上：ジムとリハビリですね。週2、3回通い、後は歩くこと。今は普通に歩けるようになりましたけど、当時は歩くのも辛かった。要するに体全体がガタガタになっていたのを立て直したんですね。

トレーニングをしたことで、今は前よりも身体の調子が良くなったように思います。フルートって健康的になれる楽器ですよ。楽器を吹くと元気になりますし、お腹もすくから、内臓もクリーンになる気がします。

——年齢は関係ないですね。

安田：本当にそう思います。

晴上：フルートは見た目ほど豪華な楽器ではないんですよ。けっこうエネルギーが必要なので、その分勘えられます（笑）。

安田：あと頭もものすごく使うのもいいですよ。

晴上：メロディを吹くことが多いから、大変じゃないでしょ、と言われることもあるんですが、ところがそこが難しい楽器だと思っています。

安田：奥が深い楽器だと思えますよ。

楽しむこと、そしてほんの少しの野心を

——今回のお話は心強く思う読者も多いのではないのでしょうか。フルートはバラバラと速いパッセージを吹いて……と知っている人も多いと思いますが、メロディだけでも人を感動させられますよね。安田：音符が少なくてもじっくり楽しめる楽器だと思えます。

晴上：今回取材をしていただけたということ、アルソ出版さんのWEBサイトで全部の出版物を拝見したんですね。全部で1321冊、商品の詳細すべてをみまし



た。フルートやオカリナ、サクソ、クラリネットなど見ていると、今回リリースしたアルバムと、アルソ出版さんのコンセプトが似ているなと感じたんです。

——え、全部ですか？ どんなところで共通した部分を感じられましたか？

晴上：ユーザーの方が楽しめること、そしてそこに愛しさを感じました。

——ありがとうございます！ 励みになります。今回のアルバムはどのような曲で構成されていますか？

安田：1曲目の「パリで帽子を買わなきゃ」は、晴上さんも気に入ってくれてスイングしてくれています。2曲目「ふるさと」、3曲目の「故郷の歌」はまったくの即興での収録。4曲目「空のさんぽ」はピアノの多重録音のようにして入れていて、元は「神の我が家」。5曲目の「グノシエンヌ」は晴上さんとヨアヒム・バーデンホルスト（C）全部で8曲収録しましたが、知っている曲もまったく違った趣向で収録しているので楽しんでいただけたらと思いますよ。一曲一曲がショートムービーで景色も感じられるのではないのでしょうか。

晴上：フルートはメロディを吹くだけなんですけど、安田さんのアレンジで様々な世界観を見ることができ、その技量が素晴らしいです。

——安田さんはフルートためのアレンジ作品・作曲を数多くされていますが、書く時に注意されていることはありますか？

安田：フルートを吹いている方が、面白いサウンドだな、印象をつかれた、と思ってもらえるように心がけています。単純に



「きれい」だけでは終わらないように、発見があるように作っています。フルートの作品の多くはムラマツフルートさんの出版になりますが、最初の依頼は、吹いていてゴージャスな気持ちになれる伴奏の楽譜が少ないので……というものでした。ですからそれは今も主眼において作っています。そのためピアノのパートは少し難しいものが多いですね。

——フルートが単旋律だからこそ、ピアノのパートが重要になってきますね。そろそろ最後の質問になりますが、今回のアルバムは年齢関係なくやりたいことはできるというメッセージが込められているように感じます。

安田：それが伝われば嬉しいですね。晴上：同じ世代の方にも楽しんでいただきたいですね。フルートをやっていらっしゃるご高齢の方はずっと続けていただきたいです。感じたままのものを好きに音にしてほしい。それが一番楽しいし、上手くなりますし、自分で幸福感を味わいながら吹けます。難しいパッセージばかり練習する日があってもいいけど、楽しく吹けるものにじっくり取り組む日があってもいいと思います。自分なりの演奏を楽しんでいただきたいですね。

安田：吹いたら楽しいのは当たり前なので、それにプラスして少しの野心を持っていただきたいですね。そうすればもっと楽しくなります。たとえばどこかで自分の演奏を発表するとか、完璧に吹けなくてもね。

——ありがとうございました。

Information ◆ CD 「NARUKAMI STYLE Flute Collection」



【POUR-1004】ブラック・レーベル ¥2,750
 【演奏】晴上 亜希子 (F), 安田 英充 史 (ピアノ・作
 編曲)、ヨアヒム・バーデンホルスト (C)
 【収録曲】パリで帽子を買わなきゃ、ふるさと、故
 郷の歌、空のさんぽ、グノシエンヌ、新月夜によ
 るボエム、雲をみていたら、故郷の人々



読者プレゼント1名様

※このCDを1名様にプレゼント！ 応募方法はP96を参照のこと。